

## メガステネス『インド誌』断片試訳

多 賀 瑞 心 (哲学研究室)

Zuishin TAGA (tr.)

A Translation of the Fragments of

MEGASTHENĒS' INDIKA

### ま え が き

ここに Megasthenēs の『インド誌』(Ta Indika) 断片の一部を訳出する。底本としては次の書を用いた。

Müller, C. : *Fragmenta Historicorum Graecorum*, II, 394—439 (Megasthenēs), Paris 1878.

このほかに良本として知られているものに

Schwanbeck, E. A. : *Megasthenis Indica, Fragmenta collegit, commentationem et indices addidit*, Bonn 1846.

があるが、未見なので、それによる英訳

McCrinkle, J. W. : *Ancient India as described by Megasthenēs and Arrian*, Calcutta 1926.

を参照した。

Megasthenēs は、B. C. 350頃—280頃のギリシア人で、Syria 王 Seleukos Nikator (B. C. 358—280) の大使としてインドの Maurya 王朝の首都 Pataliputra に派遣され、Candragupta 王の宮廷に駐在した。Alexandros 大王に攻略され、しばらくの間ギリシア人の制圧下にあつた西北インドは、Candragupta 王の台頭により、再び統一インドの領土として復活した。Seleukos は Alexandros の故地回復を志してインドに侵入したが、Candragupta に撃退され、やがて両王の講和が成立した (B. C. 304または303)。Megasthenēs が大使としてインドに派遣されたのは、その後まもない頃で、インドを去つたのは B. C. 292 頃であつたらしい。

彼はインド滞在中の見聞をもとにして『インド誌』を著わした。それは当時のインドの地理、動植物、習俗、社会制度等に関するほとんど最初の貴重な記録だったので、西洋では非常に重視された。しかし原本は早く散逸したが、後世のギリシアおよびローマの史家たちの著書中に引用されて残つた断片からその大要を知ることができる。それらの断片を Schwanbeck が収集して出版し、また別に Müller もこれを整理して出版した。前者は 59 の断片を集め、後者は 43 を数えている。しかし、両者の

間には余り実質上の違いはない。Schwanbeck は fr. 52 以下を疑わしいものとするから、真正なものは 51 ということになるし、またこれらの数の相違はほとんど引用文の切り方や配列の方針などによつて生じたものに過ぎない。従つてどちらも現在 Megasthenēs の報告として知りうるすべてのことを含んでいるわけである。

『インド誌』はもと四巻に分れていた。それはそれぞれの巻の名が諸家の引用中に指摘されていることから知られる。その内容は、Schwanbeck の編集の意図を推して見るに、(I) 地理、動植物、(II) 都市、習俗、種族、(III) 社会制度、哲学者、(IV) 伝説、神話、歴史のごとき順序で記述されているようである。

『インド誌』を引用して今日まで伝えた人たちの主なものを Müller の編集した断片によつて検討するに、Diodōros からは 1 ケ所 (fr. 1) だけ引かれてあるが、これは最も長文で、しかも『インド誌』全体の綱要であるから、特に重要である。Arrianos からは 12 ケ所 (fr. 2, 6, 18<sup>a</sup>, 19, 21, 23, 26, 35, 38, 39, 43), Strabōn からは 20 ケ所 (fr. 3, 4, 5, 7, 9, 10, 13, 18, 19, 20, 25, 27, 29, 36, 36<sup>a</sup>, 37, 39, 40, 42) で、以上三人はほとんどどの事項についても引用しているから、これらを比較してみれば Megasthenēs の原本をほぼ想像することができるほどである。それに次いで Plinius の 5 ケ所 (fr. 8, 14, 16, 31, 33), Aelianos の 3 ケ所 (fr. 11, 12, 15) があり、そのほかに 7 人からそれぞれ 1 ケ所ずつ取られている。

これらの人たちの Megasthenēs に対する評価は必ずしも一致しておらず、いきおい彼らの『インド誌』の利用方法も異ならざるを得ない。Diodōros は、学問的に確実なことを書くというよりも、明かるく楽しい文体で書いて、多くの人が喜びながら読むようにと、それに適した仕方 Megasthenēs を抜粋した。彼の書いた綱要は、内容において外の者と特に変つた所はないけれども、実に生き生きした描写で読者を魅了する。またその叙述は

他の人たちの断片的であるのに比べて、首尾一貫しているので、Megasthenēsの原本の姿を推定するのに有益である。ArrianosはMegasthenēsを批判的に見ているが、自分でも別に立派な『インド誌』を著わした（これは完本として現存する）ほどだから、多くの箇所を注意深く引用していて、有益であり、興味も深い。StrabōnはMegasthenēsを大体において信用して、引用箇所も多いが、やはり興味深く美しい記録でないものはつとめて省略し、ことに無味乾燥な名目の列挙はこれを避けた。PliniusはMegasthenēsを信用すること最も厚いものがあり、そのためしばしば不注意に過ぎる紹介に終った傾きがある。

もとより、以上のごとき人たちがそれぞれの個性に応じて理解し記録した引用から直ちにMegasthenēsの『インド誌』を再現することは不可能である。また、たとえおよその見当はつくにしても、それがすべて当時のインドの正確な記述だとは断言できないことも明らかである。しかし、それがMaurya王朝時代のインドの事情を知るための最も貴重な資料の一つであることに変わりはない。それに、最近の研究によれば、やはりMegasthenēsの記録がかなり正確なものであることが次々と証明されて来ているのである。

だが、ここにこの書を訳出しようとする意図は、その事実的正確さを検討するためではなく、むしろそれによつて東西文化交流の最も原初的な形態の一面を見たいためである。当時いかに高い文化を誇つていたにせよ、要するに閉じた世界の内部しか見ることのできなかつた西方の人の目は、Alexandrosのインド進出によつて、想像も及ばなかつた世界に向つて開かれた。見るもの聞くものすべてが驚異の的となつた。その驚きと喜びとがMegasthenēsをして『インド誌』を書かせたに違いない。彼はHimalayaの峰々、Indos, Gangēsの流れ、そしてはてしのない大平原に目を奪われた。炎暑と豪雨とは思ひもかけぬ激しいものであつた。時におだやかな、時に荒々しいこの自然の中でそれぞれにおのが命を生きていく数々の動植物、稲も芦（アシ）も、象も蛇（ヘビ）も、かつて見かけたことのないものであつた。この純粹素朴の驚きがこの国土と住民とへの限りない愛着の念を呼び起したであろうことは疑えない。農民と耕地を侵害することのない民族性に感動し、婆羅門（バラモン）や沙門（シャモン）の行者に敬服する心は、既に異邦人のものではない。ここにもう文化交流は始まつていたのではないか。さればこそVisṇuとŚivaの神話を聞いて、直ちにそれをHēraklēsとDionysosのこととして無理なく信ずることができたのである。彼はまたMaurya

王朝の政治制度の完備、首都Pātaliptraの豪華を語つたが、僅か三十年前から受けたギリシア文明の刺激がなかつたらそれらが果してどれほどのものになつていたかを、彼は考えてもみたことがあるだろうか。このちインドはAsōka王の出現によりいよいよ西方との交渉を緊密にし、さらに下つてかのGandhāra美術のごときギリシア化された文明をもつに至つた。恐らく目に見えない思想的交渉も意外に多かつたと考えられるが、<sup>(1)</sup>すべてそれらの文化交流の基盤には上に見たMegasthenēsにおけるごとき素朴な感動と共感とがはたらいていたと見るべきであろう。このような観点から『インド誌』を見ることもあながち無意味ではないと思う。

さて、ここに『インド誌』断片の全部ではなく、わずかにその始めの部分fr. 1—10だけを訳出するのは、紙数の制限にもよるが、これだけでも上に述べたようなMegasthenēsの感動をほゞ伝えることができると信ずるからである。

次に、本文訳出上の要領を示しておく。

(1) 断片番号はMüller本により、その右に( )の中にSchwanbeck本の番号を添える。

(2) 断片番号の次の行にその断片の内容見出しを付記する。

(3) 地名、人名は底本のつづり方に従い、これをローマ字で表記する。「インド」だけは片仮名書きにする。またわが国で慣用のものはNeilos(ナイル)のようにして示す。

(4) < >は原文にはないが補つて読むべき語句を示し、[ ]は原文にはあるが編集者が一応省いて読むべきものとした語句を示し、( )は訳語に相当する原語を示す場合、または分りやすく説明する場合に用いる。

(5) 注は最小限にとどめ、考証にわたることはすべて省く。

## 訳 文

### 1 (1)

#### 綱 要

<sup>(2)</sup>(Diodōros II. 35) インドの形状は四辺形であつて、その東と南の辺は大洋に囲まれ、北側はEmōdos山によつて、Sakai族と呼ばれるSkythia人の住んでいるSkythiaから、分かれ、第四に西側の辺はIndos(インダス)と呼ばれる川によつて区切られるが、この川は恐らくNeilos(ナイル)川に次いであらゆる川のうちに最大のものであろう。インド全体の広さは東から西へ28,000スタディオ<sup>(3)</sup>ン、北から南へ32,000スタディオンあると言われる。それほど広さであるから、ほとんど北熱帯の全

域を含むと見え、インドの辺境の諸所では垂直の棒に影を見ることができないし、夜は大熊星座 (Arktos) が見られず、最も遠隔の地には大角星 (Arktouros) すら現われないのである。だからそれに応じて物の影は南に向つて落ちると言うことである。

インドにはあらゆる種類の果樹に富む大きな山が多く、また地味よく肥えた大平原も多いが、その美しさはすばらしく、あまたの川がその間を横ぎつている。土地の大部分はよく灌漑されており、ために年に二度の収穫がある。また並々ならぬ大きさと力をもつ、陸棲類といわず飛翔類といわず、あらゆる種類の動物がいたる所にいる。そしておびただしい数の巨大な象が産れるが、その食料は大地が惜しみなく供給するので、この動物の力の強いことは Libya 産のものをはるかにしている。そういうわけで沢山の象がインド人に狩獲されて戦争向の訓練が施され、それが勝利を決するに重大な寄与をなすのである。

(36) また同じように、人間もこの豊かさに養われて、身長も体重も共に傑出している。吸う空気は清く、飲む水は澄んでいるためか、彼らは技術にも巧みである。大地は栽培されたなり物を豊富に産出するが、また地下に埋蔵するありとあらゆる金属の鉱脈もおびただしい数にのぼる。すなわち、そのうちには多量の金や銀があり、銅や鉄も少なからず、さらに錫 (スズ) やそのほか裝飾、実用、軍備等に必要なものがある。栽培された穀類の外に、インドには、潤沢な河川に灌漑されて、多量の黍 (キビ) が育成し、種々の豆類も多く、bosporon と呼ばれる稲も同様であり、そのほか数々の食料になるものがあるが、その多くは野生である。なおその外に食用植物が少なからず産出されて動物を養うことができるが、それについて記述すれば余り長くなるであろう。そういうわけで、インドは一度も飢饉に襲われたこともなければ、一般に日常の食糧に不足したこともないと言われている。なぜかという、そこでは毎年二度豪雨が降るからである。一度は冬期で、丁度ほかの国に比べると同様に小麦の種まきが行われ、もう一度は夏至の季節であつて、その時は稲、すなわち bosporon、それに胡麻 (ゴマ) や黍 (キビ) の種がまかれる。そして大抵いつでもインドの住民はこれら両方の作物で大収穫をあげる。たとえ一方が全く豊作でなくても、他方が凶作ということはないのである。それにまた野生のなり物や湿地に生じて独特の甘味をもつ草木根などが人間に豊かな食糧を供給する。すなわち、ほとんどの野平も甘美な河水に潤い、また年ごとに驚くべき規則正しさとめぐり来り、大地をおおう空中からなま暖かいしたたりとなつて降り注ぐ

豊潤な夏の雨に浸されるが、同時に沼地に生ずる植物、特に巨大な芦 (アシ) の根は煮えくりかえる暑熱の中で成熟するのである。しかしまたインド人の間には一つの慣例があつて、彼らのうちに少しも食糧の不足をきたすことのないためにあずかつて力がある。それというのは、他の民族の間ではよく敵軍が耕地を踏みじつて荒廢地にしてしまうようなことがあるのに、ここでは農民は神聖で害すべからざるものとされているから、戦場の近くでは耕作している人たちが何ら危険を感じないのである。敵味方双方が互いに戦闘においては殺し合ひながら、農業にたずさわる者は、みな有益なものに変わりはないというわけで、これを害しないですまし、また相手の土地を焼き払うことか樹木を切り倒すようなことなどしないのである。

(37) またインドの地には航行可能の大河が多いがそれらは源を北方に連なる山々に発し、平原を貫流し、その少なからざるものが合流して Gangēs (ガンジス) と呼ばれる川に注ぎ込む。ところで、この川は始め川幅 30 スタデオンで、北から南へ流れて、Gandaridai 族の居住地の東岸を洗う *Ōkeanos* (大洋) に注ぐが、いま言う種族はおびただしい数の巨大な象を所有している。このためにこの土地はいまだかつて外国の王に征服されたことがない。他の種族はみなこの動物の数と力とに恐れをなしてしまう。こうして Makedonia の Alexandros でさえも、全 Asia を征服しながら、この Gandaridai 族のみはこれを攻撃しなかつたのである。すなわち彼はその全兵力と共に Gangēs 川まで到達し、他のインド人を屈服せしめながら、Gandaridai 族が戦備の整える 4,000 頭の象を所有することを聞き知るや、この種族の侵略を断念したのである。Gangēs と好一對をなす川は、Indos 川と呼ばれるが、同じように源を北に発し、*Ōkeanos* に注いで、インドの境界となる。そして多くの平原を貫流し、船の通いうる支流を少なからず合するが、そのうちで最も著名なのは Hypanis, Hydraspēs および Akesinos の諸川である。これらの外にも様々の川が多数貫流して、その土地一面に多くの園芸植物や各種のなり物類を繁茂せしめている。さて、河川が多くて水量が豊かなことについて、この地の哲学者や自然学者たちは次の如き理由をあげる。いわく、インドをとりまく国々、すなわち Skythia 人, Baktria 人、それからまた Arya 人の地はインドの地よりも高く、そのため自然に小川があらゆる方向から低地に向つて一せいに流下し、この地を除々に潤し、数多くの河川を生ぜしめるのである。ところで、インドにある川のうちの一つ、すなわち Sillas と呼ばれ、同名の源から流れ出る川に、ある奇異なことが起

くる。それは、すべての川と違つてこの川においてのみ、いかなる物をそれへ投げ入れても決して水面に浮ばず、不思議にもみな水底に沈んでしまうのである。

(38) ところで、この広大なインドの地には様々の種族が多数居住し、しかも一として国外に起源をもつものではなく、すべて原住民と考えられ、加うるに外国の移民を受け入れもしなければ他種族の中へ移民を送り出したこともないと言われる。また伝説によれば、太古の人間は、食物にはその土地に自生するなり物を用い、衣服には、ギリシア人と同じように、野獣の皮を用いた。また同様に、種々の技術やそのほか生活に役立つ事物を次第に発見して行つたが、それはもともと素質に恵まれ万事に力添えとなる手と言葉と心の賢さとをもつ動物（人間）に必要そのものが教え込んだからである。

インドの大学者の間に、ある伝説が行われているが、それについて簡単に述べるのが適切であろう。その語るところによれば、人々がまだ村々に離れ離れに住んでいた大昔のこと、Dionysos<sup>(5)</sup>がものすごい軍勢を率いて西の地方から現われて来た。そしてそれに対抗できるだけの大都市の一つもないインドの全国土を侵略した。しかし猛烈な暑熱が襲い、Dionysosの兵士たちの中に疫病で倒れる者が出て来たので、わけて賢明なこの指揮者はその軍隊を平原から山地の方へ導いた。そこには冷たい風が吹き、澄んだ小川の水が泉のほとりを流れていたもので、軍隊は元気を取りもどした。ところで、Dionysosがその軍勢を病氣から回復させた山のこの地点はMērosと呼ばれる。確かにそういうところから、ギリシア人たちはこの神のことを、Dionysosは父の腿（もも、mēros）の中で養われた、と子孫に言い伝えてきたのである。その後、彼は有用植物の栽培に意を注ぎ、これをインド人に伝えたり、酒やその他の生活物資の製造法を授けたりした。加うるに彼は村々を格好な場所に移して、大都市の建設者となり、神の崇拜を教えるとか法律や法廷をもたらすなど、一般に数多くの立派な事業の創始者となつたので、神として信仰され、不滅の尊敬を得たと言われる。言い伝えによると、彼は大勢の婦女子をその軍隊と共に連れて来たし、また戦陣を配備する時には、当時まだ喇叭（らつば）が発明されていなかったので、太鼓や鑼鼓（にようはち）を使用した。そして彼は五十二年のあいだ全インドに君臨した後、老齢で死んだが、その統治権を継承した彼のむすこたちはずつと自分たちの子孫にその王位を伝えてゆき、ついに多くの世代を重ねた末、その主権が崩壊して、民主政体が諸都市に起つたということである。

(39) Dionysosとその子孫について、インドの山地

の住民は以上のような説話を伝えている。また彼らはHēraklēs<sup>(6)</sup>も自分たちの所で生れたと言い、ギリシア人と同様に、彼に棍棒と獅子の皮とを与えている。彼の体力と剛勇とは他の人々よりもずつとすぐれていて、海陸の悪獣を一掃した。多数の妻と結婚して多数の男の子を生んだが、娘はただ一人だけであつた。その子供たちが成人に達すると、全インドをそれと同数に分けて、男の子たちをそれぞれの王となし、またその一人娘もこれを育てあげて女王となした。また彼は少なからざる都市の建設者となつたが、中でも最も著名にして壮大なものをPalibothra<sup>(7)</sup>と名づけた。そしてその内に豪華な宮殿を設け、また移民の大衆を居住せしめた。またこの都市を固めるにすこぶる大きなほりをもつてし、川から水を引いてこれに満たした。こうしてHēraklēsは人間界から離脱した後、不滅の尊敬を得た。彼の子孫はそれから長いあいた君臨してめざましい業績をあげたが、国外へ遠征したこともなければ、他種族の間へ移民を送つたこともなかつた。だが長い歳月が経過した後、大部分の都市は民主政体をとつて来たが、ある種族はなおAlexandrosの侵入の時まで民主政体を維持していたという。インド人の間に存在する幾つかの珍らしい慣習のうち、その古い哲学者たちによつて制定されたもので、はなはだ称讃に価すると考えられるものがある。すなわち、法の規定によれば、彼らの間には絶対に奴隷は存在せず、むしろ各人が自由であつて、万人における同権を尊重すべきことになつている。なぜならば、自己が他に優越せるものでもなければ、隷属するものでもないことを知つた者こそ、いかなる境遇に対しても最善の生活を取りうるであろうから。けだし、法はこれを万人に平等に制定しながら、権力はこれを不均衡に与えるということは、無意味である。

(40) インドの全民衆は七つの部類<sup>(8)</sup>（meros）に分かれているが、その第一は哲学者<sup>(9)</sup>（philosophoi）の集団であつて、数においては他の部類に劣るけれども、尊厳においてはいずれをも抜いて首位にある。哲学者たちはいかなる公共的負担の責めももたず、それに他人を支配することもなければ、他人に支配されることもないからである。もつとも私的な人々からは生者のための供饗や死者のための葬式に招かれるが、それは彼らが神々と最も親交があると共に、地下界（Hadēs）の事の特によく熟知していると思われているからであり、彼らがこの奉仕によつて受ける報酬と尊敬とは著しいものである。また彼らはインド人一般にも大きな功德を与える。すなわち、年の始めに大集會に招かれると、大衆に向つて日照りや雨天のこと、順風や悪疫のこと、そのほか聴衆の利益にな

りそんな事柄を予言する。こうして将来のことを前もつて聞き知るや、民衆も君主も絶えず来るべき不足を補い、必要なものをあらかじめ準備するのである。しかし予言に失敗した哲学者は汚名の報いを招くほかなく、余生を沈黙のうちに終ることになる。

第二は農民 (geōrgoi) の部類で、その数は他のものをはるかに越えているようである。彼らは軍事的、その他の公共的な義務は免除され、ただ農耕のことに没頭する。いかなる敵も、土地で働いている農夫に出くわした場合は、これに害を加えようとはせず、むしろ共通の愚人と考えてあらゆる不法行為をさし控える。そのために土地は荒らされずすみ、作物も豊かに実り、人々に食物の上の大きな喜びを与える。農民は妻子と共に地方で生活し、都市へ出て行くことは全くしない。彼らは王に地租を納めるが、それはインドの土地がすべて王のものであつて、誰も私的に土地を取得することは許されないからである。この納税のほかには彼らはまた収穫の四分の一を王室へ納める。

第三は牛飼、羊飼、一般に、町や村に居住しないで、天幕生活を送るあらゆる牧夫 (nomees) の階級 (phylon) である。この人たちは同時に狩猟を行い、害鳥野獣を追い払つて土地を掃討する。そしてこの仕事に精を出して働き、農民のまいた種を食い荒らすあらゆる種類の鳥獣類に満ちたインドの土地を開拓する。

(41) 第四は職人 (tekhnitai) の部類であつて、そのうちには武器製造者もあれば、農夫その他の人々の仕事に必要な道具を製造する者もある。そしてこの人たちは税を免除されるのみならず、王室から穀物の扶持さえ受ける。

第五は軍人 (stratiōtai) の部類であつて、よく軍備が施され、数では第二位を占めるが、平和の時にはおおむね無為と娯楽にとふける。そして兵士、軍馬、軍象等の部隊はすべて王室の費用によつて維持される。

第六は監視官 (ephoroi) の部類である。この人たちはインドにおいて起こる万事を調査し、監視して、これを王に報告する。もつともその国に王のない場合には、長官たちに報告する。

第七は公共の事柄について評議する評議官 (bouleuon)、すなわち参議 (synedreion) の部類で、数においては最も少ないが、門閥と識見とにおいてはいずれにもまして尊敬されている。というのは、彼らのうちから王の顧問も、大蔵大臣も、争いを調停する裁判官も出るし、また一般に司令官や長官も彼らのうちからとられる。

インドにおいて区別される国民の部類は以上のごときのものである。そしてだれも自己の種姓 (genos) 以外の

ものと婚姻したり、異なる種姓の職業や技術にたずさわることにはできない。たとえば、軍人でありながら農作をしようと、職人でありながら哲学することは許されない。

(42) インドの国土にはおびただしい数にのぼる巨大な象がいて、その力も大きさもよそのをはるかにしのいでいる。この動物は、ある人たちの言うように、変つた仕方であつたものではなく、馬やその他の四足獣と同じことである。その懐胎期間は短くて16ヶ月、長くて18ヶ月である。そして馬と同様に、大抵1匹の子を産み、生れた子に母象は6年のあいだ乳を飲ませる。大部分はごく長命の人間ほど生きるが、最も長生きのものは200年も生きる。

インドには外国人のためにも役人が置かれてあつて、それは外国人が不法行為をなされないように願慮する。外国人に病む者があれば医者遣わしたり、その他の世話をしてやり、もし死ねば埋葬してやり、さらにその遺産は身内の者に引き渡す。裁判官もまた外国人の間への事件に的確な判決を与え、犯罪者に対してはきびしく処罰する。それではインドおよびその古伝説についてはこれまで語つてきたところで充分としよう。

#### (第一巻) 2 (2)

#### インドの境界、地勢、河川について

(Arrianos<sup>(10)</sup> 『アレクサンドロス出征記』 V, 6, 2) Eratosthenēs<sup>(11)</sup> や Megasthenēs、この後者は Arakhōsia の知事 Sibyrtios の許に滞在し、また自ら言うところでは、しばしばインドの王 Sandrakottos<sup>(12)</sup> を訪れたことがあるが、この人たちの言によれば、南 Asia がまた4部分に分けられ、その最大なものはインド、最小なものは Euphratēs 川と我々の海とによつて境される地域である。Euphratēs 川と Indos 川との間に限られる二つの地域は、その二つを合せてほぼインドと比較するに足る。

(3) インドの地は東部において南方に向つて大洋によつて境される。その北辺は Kaukasos 山脈が、Tauros 山と相い合するところまで、境界となる。また西と西北西の方面は大洋に至るまで Indos 川が境をなす。そしてこの地の大部分は平原であつて、これは人が推測するように、諸河川による沖積土である。(4) というのは、他の国でも海からほど遠からぬ平原はおおむねそれぞれの土地の河川によつて出来たものであつて、そのため昔からその土地さえも川の名で呼ばれる。たとえば、Hermeros という平原は <小>Asia の地にあつて母神 Dindymēnē の山から発し Aiolia の都市 Smyrna の近くで海へ注ぐ川の名にちなんで呼ばれ、Lydia の Kaÿstros 平原も、

MysiaのKaikos平原も、それにIoniaの都市Milētosに至るまで延びているKariaのMaiandros平原もそうである。……(6) それゆえにそれぞれの土地に一つの川があり、そしてそういう川が、余り大きくなくても、その源のある高地から沈泥を運び下りながら、海へ注ぐ際に、土地を広げるに足るとすれば、インドの地に関して、その大部分が平原であつて、しかもその平原が諸河川による沖積土であるということに疑うのは当らない。(7) なげなら、Hermos, Kaystros, Kaikos, Maiandros等、内海へ注ぐ川の多くは、たとえそれらをみな合せても、その水量をインドの川の一つにも比較するだけの値打ちがない。ましてその最大なるGangēs川に対してはなおさらのことであつて、この川に対すればAigyptos(エジプト)のNeilos川の水もEuropē(ヨーロッパ)を貫流するIstros(ダニユーブ)川も比べものにならないのである。(8) それどころか、上の諸河川をみな合せてとしても、Indos川とさえも等しくはならない。この<Indos>川はその源から直ちに大河として発し、<小>Asiaのどの川よりも大きい15の支流を合せ、しかも依然としてその名称を保持しつつ、ついに海へ注ぎ入るのである。インドの国土についてさしあたり以上のことだけ述べたことにし、その他のことはわたしの『インド誌』のために残しておこう。

## 3 (4,6)

## インドの境界、大きさについて

(Strabōn XV.1, 11, 689) インドは北部において、Arianaから東方の海に至るまで、Tauros山脈の最端部によつて限られる。この山を土地の住民たちはParopamisos, Emōdos, Imaōs, その他いろいろの名で呼んでいるが、Makedonia人はKaukasosと言っている。西部はIndos川によつて限られ、南および東の二辺は、他の二辺よりもはるかに長く、Atlasの海へ向つて突出し、ためにその国土は菱形になり、長い方の辺がそれに対応する辺よりもそれぞれ3,000スタディオンだけ長いから、これがすなわち東および南の海岸に共通の岬の長さであるから、それは両方向においてその他の海岸よりも同じだけ長く突出しているわけである。さて、Kaukasosの山々から南の海に向つてIndos川の川沿いをその河口に至るまでの西方の一辺は約13,000スタディオンあると言われる。従つて、その反対の東側の一辺は、岬の3,000スタディオンを加えるから、16,000スタディオンあることになろう。これがこの国土の最大および最小の幅である。長さは西から東へ向つて走るが、Palibothraまでの長さはもつと精確に言うことができる。それは測り繩

(skhoinion)で測量されたことでもあり、また10,000スタディオンの王道(hodos basilikē)でもあるからである。それから先きは海からGangēs川をPalibothraまで溯航することによつて推測されるに過ぎない。そしてそれはほぼ6,000スタディオンになるであろう。そこで全体は最短限16,000スタディオンであるが、これが最も信用すべき宿駅台帳(hē anagraphē tōn stathmōn)からとつたものであることはEratosthenēsの言うところであつて、Megasthenēsもこれに同意している。もつともPatriklēsはそれよりも1,000スタディオンだけ少ないと言っている。……(中略)……(12, 689-690)これによつて他の記者たちがいかに相違しているかが分かる。KtēsiasはインドはAsiaの自余の部分よりも小さくないと言い、Onēsikritosは人の居住する土地の三分の一だと言い、Nearkhosは平原そのものを行くだけで4ヶ月かかると言うが、MegasthenēsとDēimakhosとの推定はもう少し穩健である。すなわち彼らは南の海からKaukasosの山までの距離を20,000スタディオン以上となす。

## 4 (5)

## インドの大きさについて

(Strabōn II.1, 7, 69) Hipparkhosが『覚書』第二巻の中で言うところによれば、Eratosthenēs自身はインド北辺の長さに関するPatriklēsの論拠をば、Megasthenēsと一致しないがゆえに、疑っている。すなわち、Megasthenēsは16,000スタディオンとなし、Patriklēsはそれよりも1,000スタディオンだけ短かいと言っている。

## 5 (7)

## インドの大きさについて

(Strabōn II.1, 4, 68-69) [かかる主張に対してHipparkhosは、その論拠を疑つて、反対する。すなわち、Patriklēsは信頼に値しない。] DēimakhosとMegasthenēsの二人がその反証となる。この二人の言明によれば、南の海からの距離が、ある地点では20,000スタディオン、他の地点では30,000スタディオンである。これが実に彼らの主張するところであり、しかも古い地図もそれに合致すると言うのである。

## 6. (8)

## インドの大きさについて

(Arrianos『インド誌』III.7-8) しかしMegasthenēsの考えでは、インドの東から西に至る、他の人たちが長

さとなす距離は幅である。そして Megasthenēs はその最短距離が 16,000 スタディオンあると言う。北から南に至る距離は彼によれば長さであるが、その最も狭いところで延長 22,300 スタディオンある。

## 7 (9)

#### 大熊星座が姿を隠すこと、影が反対の方向に出来ることについて

(Strabōn II. 1, 19, 76) [また彼 (Eratosthenēs) は Dēimakhos の無知とかかる事柄に関する無学とを示そうとした。すなわち彼 (Dēimakhos) はインドが秋分点と冬至点との間に横たわつていると考えたり、] インドの南部地方では大熊星座が姿を隠し、影が反対側に落ちるといふ Megasthenēs の主張に [反対したりしたが、その主張する事柄はいずれもインドでは決して起こらない。ゆえにこのような主張は無学を現わしているのである。]

(Strabōn II. 1, 20, 77) [彼 (Eratosthenēs) はこの意見に同意しないで、] Dēimakhos が、Megasthenēs の解したような、大熊星座が姿を隠すことや影が反対に落ちることなどの現象がインドのどこにも存在しないと主張したゆえをもつて、[その無知を非難した。]

## 8 (10)

#### 大熊星座について

(<sup>(22)</sup> Plinius 『自然誌』 VI. 22, 6) それ (Prasii 族) について、奥地に Monedes 族と Suari 族とが住み、そこに Maleus 山があるが、この山では物の影が冬は北へ、夏は南へ向つて、それぞれ 6 ヶ月の間、落ちる。大熊星座は、Baiton<sup>(23)</sup> によれば、この地方では一年のうちでただ一度だけ現われ、それも 15 日をこえない。それと同じ現象がインドの諸所に起こると Megasthenēs は言う。

## 9 (11)

#### インドの豊饒さについて

(Strabōn XV. 1, 20, 293) Megasthenēs はインドの地味の豊饒を果物や穀物が二毛作である事実によつて指摘する。同じことを Eratosthenēs も述べ、種まきに冬のものと夏のものとがあり、また雨にもそれのあることを語っている。すなわち、その言うところによれば、この両季節に雨のない年を知らず、従つてこのことから土地に不毛の時がないがゆえに、豊年になる。また樹果の産出も多く、植物の根、ことに大きな芦 (アシ) の根も同様で、それはなまのままでも煮ても味がよいが、そのわけは水が、空から降つたのも川のも、みな太陽によつて熱せられるからである。そこで、ある意味において彼の言わん

とするところは、外の地で果実や樹液の成熟と呼ばれることが彼らの所では煮沸であつて、それが火による煮沸と同じ効果をその風味に与えるということである。また彼は、上の理由によつて、車輪の作られる樹木の枝が柔軟であることや、同じ理由から羊毛の花 (綿花) の開く木さえあることを述べている。

## 10 (12)

#### インドの野生動物について

(Strabōn XV. 1, 37, 703) Megasthenēs によれば、Prasioi 族の地にはきわめて大きな虎がすんでいて、その大きさは獅子 (シシ) の約 2 倍もあり、力の強いことは飼いなされた虎 (トラ) でも、4 人の人に引かれていながら、後足で驃馬 (ラバ) をひつつかみ、力づくで自分の方へ引き寄せるほどである。また尾長猿 (オナガザル) は最大の犬よりも大きく、その顔だけは黒いが、そのほかは白い。もつともよそではその逆である。その尾の長さは 2 腕尺以上ある。そしてこの猿はごく温和で、人を襲つたり物を盗んだりするような凶悪な性質をもつてはいない。また乳香色の石が採掘されるが、その味は無花果 (イチジク) や蜜よりも甘い。そしてまた他の地方には蝙蝠 (コウモリ) のように膜質の羽をもつた、長さ 2 腕尺の蛇 (ヘビ) がいる。これは夜間に飛びまわり、尿や汗のしずくを放出するが、それは無防備の人の皮膚を腐らしてしまう。それから、非常に大きな羽のある蝸 (サソリ) もいる。また、黒檀 (コクタン) も成育する。また、凶猛な犬がいて、何かにかみついたが最後、鼻孔の中へ水を注ぎこまぬかかざり、放さない。そして、中には、余り激しくかみつくために、目がゆがんでしまうのもおり、また本当に眼球のとび落ちるのもいるほどである。獅子でも雄牛でも犬のためにしつかりと捕えられ、雄牛などは鼻を押えられでもしたら解き放されるまえに死んでしまう。

## 〔注 記〕

- (1) その一例に『ミリンダ王の問い』 (Milindapāṇha) — 漢訳『那先比丘經』がある。これについては、中村元：『インド的思惟——ギリシア的思惟との対決——』、春秋社、昭和 25、にくわしい研究がのつている。なおこの書物は Megasthenēs の『インド誌』についても解説している (pp. 3—8)。
- (2) Diodōros, B. C. 1 世紀末の歴史家。『図書館』 (Bibliothēke) の名で呼ばれる世界史の大著 40 巻 (原存、第 1—5 巻、第 11—20 巻) がある。
- (3) スタディオン (stadion) は古代ギリシアの長さの単位で、約 200m (Athēnai では 185.2m, Olympia では 192.3m)。

- (4) 栽培されたなり物, *dēmētriakos karpos*. 「*Dēmētēr* (農業の法を教えた五穀豊穡の女神) のなり物」の意で、野生のものに対して言つたものであろう。なお *karpos* は一般に植物から取れるものを総称し、穀物に限らず、果実、葉、根に至るまで含むので、仮に「なり物」と訳し、また「穀物」「果実」等、適宜の訳語を用いておいたところもある。
- (5) *Megasthenēs* はインドの *Śiva* 神の神話からそれに類似する *Dionysos* を想起したのである。辻直四郎編：印度，偕成社，昭和18, p. 257 (中村元「神話と伝説」参照)。
- (6) *Hēraklēs* はインドの *Viṣṇu* に当てられたであろう。辻直四郎編：前掲書参照。但し *Śiva* を当てる人もある (McCrimdell : *Ancient India*, p. 37 note)。
- (7) *Palibothra*. インド名で *Pāṭaliputra* (現在の *Patna*)。Maurya 王朝の首都。Palimbothra とも書かれる。
- (8) 部類 (*meros*)。いわゆる *caste* (カスト) のことで、種姓、姓階、階級等いろいろ呼ばれるが、時代と地方によつて内容においても数においても大きな相違がある。*Megasthenēs* のあげた七つの部類は、インド側の有名な文献 *Kautilya* の *Arthaśāstra* (実利論) の記述によく合致するという (金倉円照：印度中世精神史，上，岩波，昭和24, pp. 185—186)。
- (9) 哲学者とは婆羅門，沙門をさす。
- (10) *Arrianos*. A. D. 95頃—175頃。ギリシアの歴史家。著書『アレクサンドロス出征記』7巻，『インド誌』等。
- (11) *Eratosthenēs*. B. C. 275頃—194頃。ギリシアの博学者。著書に最初の数学的地理学書 *Geographica* がある。
- (12) *Sandrakottos*. *Candragupta* のこと。インド最初の統一者，Maurya 王朝の創始者 (在位 B. C. 316—293 頃)。*Sandrottos*, *Androkottos* 等いろいろにつづられる。この王の時代の事情については次の書を参照。佐保田鶴治：印度古代史，弘文堂，昭和18, pp. 167—186。金倉円照：前掲書，pp. 179—192。
- (13) *Strabōn*. B. C. 64—21以後。ギリシアの地理学者で歴史家。著書 *Geographia* 17巻。
- (14) 「Atlasの海」(*Atlantikon pelagos*) 現今の大西洋とは違う。古代人は世界を Atlas の海に囲まれた島と考えていた。Atlas は天空を双肩に担う巨人 (*Titan*) で，Atlas 山脈を象徴したものとと言われる。
- (15) 測り繩。*skhoinos* がギリシアの長さの単位 (10, 500m または 40 *stadion*) であつて，そこから *skhoinion* は「測り繩」となる。
- (16) *Patroklēs*. *Seleukos* 王の提督。*Strabōn* はこれを最も信頼すべき記者だという。
- (17) *Ktésias*. B. C. 4世紀後半のギリシアの歴史家。ペルシア史やインド史を書いたが現存しない。
- (18) *Onēsikritos*. *Alexandros* 王に従つて東征して，見聞記を書いた。
- (19) *Nearkhos*. B. C. 312死。*Alexandros* 王の部将。著書『沿岸航海記』
- (20) *Dēimakhos*. *Syria* 王 *Seleukos* によつて *Candragupta* の後継者 *Bindusāra* のもとへ使節として派遣され，インドの見聞記を書いたが，それは散逸した。
- (21) *Hipparkhos*. B. C. 190頃—25頃。ギリシアの天文学者。
- (22) *Plinius*. A. D. 23—79。ローマの著述家，著書『自然誌』37巻。
- (23) *Baiton*. *Alexandros* 王の遠征に従軍した。